

令和 元年 6 月 11 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K03959

研究課題名(和文)社会参加のための障害者・児の「生のリテラシー」を実証する研究

研究課題名(英文)The Literacy of Persons and Children with Disabilities for Social Inclusion

研究代表者

柴田 邦臣 (Shibata, Kuniomi)

津田塾大学・学芸学部・准教授

研究者番号：00383521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、障害者福祉領域において「必要な知識」が「必要な人」に共有され継承される方法の探索にある。まず障害当事者が、社会の中で生き学ぶことから、必要な知識・技法を「生のリテラシー」として概念化し把握するすべを理論的に考察した。次にその「生のリテラシー」を抽出し、目に見える形で蓄積したり活用する技法をフィールドワークをとおして考察し、障害者・児がそのデータを蓄積できるアプリを開発して試用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、障害者の生きる場における「生きる知恵」を活かす術を探るところにあった。特に、障害者・児が活用できるアプリを作成し、試験的な活用をしたが、その成果は国内の学会、さらには国際学会での報告や国際的なジャーナルに投稿されるなどして公表された。さらに社会貢献として、社会参加のリテラシーの理解・整理という点では、一般の方も国際事情を学べる会を開催すると共に、雑誌記事などでも成果を発表するなど、社会的貢献に務めた。

研究成果の概要(英文)：This research presents the way how to share and take over knowledges to the people who need them in the field of welfare for the people with disabilities. The research aimed to consider logically how people with disabilities survived in their societies and conceptualize and understand it as "Literacy for Surviving".

"Literacy for Surviving" was extracted from daily life, and the application was developed based on the fieldwork. The academic value of this research is to find the way to make use of the way the people with disabilities live their lives. The trial results of the application were presented in academic conferences and published in academic journals in and out of Japan. The public events seminars were held to study the circumstances of people with disabilities in foreign countries and reported in the media. Not only for contributing in academic fields, this research also aimed to understand what is needed to join society and organize the knowledges for contributing society.

研究分野：社会学

キーワード：障害児 学習 支援技術 インクルーシブ教育 タブレット・メディア

1. 研究開始当初の背景

これまで、「社会的マイノリティ」の社会参加は、常に日本社会における中心課題であった。

社会福祉・障害者福祉の領域においても、テクノロジー面を担当する情報学等の領域においても、社会参加の実現には、多くの労力をかけられてきた。これまで数多くの福祉研究が言及してきたように、私たちは繰り返し、障害者の社会参加という「社会問題」に直面し、その克服に四苦八苦してきた。にもかかわらず、未だに多くの障害(児)者が、修学、就職、自己実現などの社会的な活動に参画するチャンスを得られず、苦しんでいる。

一方で私たちは、すでに立派に社会参加を結実された「障害者人生の先行者」たちを知っている。先人の中には、その障壁を巧みに乗り越えくぐり抜けて、社会参加を結実させた例もある。彼ら彼女らの成果は社会福祉学・障害学の先行研究においても、繰り返し言及されてきた。しかし、その先人の努力と成果は、本当に、私たちに共有され、活かされているのだろうか。肝要なのは、この情報化した社会においてさえ、先人の社会参加の経験、つまり「障害者が社会で生きるための知と技法」が、後進として苦しむ私たちに共有されておらず、その術も存在していないことにある。

安積ほか(1990)は障害者の固有体験から、遅しくかけがえの無い「生の技法」を提起したが、それは個別具体的すぎて、共有までには距離がある。むしろその技法を、共有可能な知恵として把握するためには、R.Hoggard(1974)以来、注目されてきた「リテラシー」概念が有用だろう。つまり私たちにとって重要なのは、先人から学習可能な「生きるためのリテラシー」なのである。また A.Goffman の概念を参考にすれば、課題は「状況」(situation)ないしは「社会的場面」(social occasion)(Goffman,1963:18=1980:20)が異なっていると説明できよう。逆にいえば「状況」ごとの整理が可能であれば、それを「鍵」とすることで「生きるためのリテラシー」を探し出すことができる。

2016年施行の「障害者差別解消法」の施行以降、障害当事者の社会参加は大きな変化の潮流の只中にある。その流れを踏まえ、障害のある人・子どもの「生きるためのリテラシー」の枠組みと実像を描き出すことをめざしていく。

2. 研究の目的

本研究の目的は、障害者福祉の領域において、「必要な知識」が「必要な人」に共有され継承される方法の探索にある。現状、それが果たされていない理由は、以下の2点に求められよう。(1)経験の供給・蓄積側の背景：障害がある人は、自分の人生を精一杯、生きている。生きる工夫そのものが「社会参加の知」の集積ともいえるが、本人にとってそれは変わらない「日常生活」でしかない。自分たちの人生の、どこに「生きるための知」としての価値があるかがわからないため、それを他人が参照するためには、「わかりやすく整理し記録する」過程が必要になる。(2)その知識を参照する側・需要側の背景：自閉症児から学んだ私の例のように「同じ障害の先輩に聞く」だけで全てが解決するわけではない。当事者がおかれている状況は様々で、直面している課題も少しずつ異なる。

本研究は、以上のような観点から、2つの研究目的を設定した。まず一つは、(1)障害当事者が、社会の中で生き学ぶことの背景を概観し、そのために必要な知識・技法を「生のリテラシー」を概念化し把握するすべを考察する。2つめは、その(2)「生のリテラシー」を抽出し、目に見える形で蓄積したり活用したりする技法を考察する。そもそも、障害者のメディア利用における社会科学的研究がほとんどなされていないなかで、その基本的な分析枠組みから、タブレット・アプリなどの具体的なテクノロジー利用までを射程に入れたものである。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、本研究は2つの手法をとる。第一に、(1)において障害当事者の「生のリテラシー」を整理し考察する分析軸を精緻に設定する必要がある。それを具体的に実現する方法としては、先行例を新たな視点で整理しなおす文献収集と、具体的に障害当事者の生きるありようをフィールドワークなどで調査する手法をとることになる。社会参加を実現させたり、ないしは社会的、地域的事情によって困難に直面している例を、ひとつひとつ読み解いていったりする作業が求められる。

もうひとつが、具体的な(2)「生のリテラシー」を抽出、把握し、蓄積していく方法である。そのために、先行する研究や実際に自ら調査票などによってデータを収集する手法をとる。さらに具体的に、障害当事者研究においてトレンドを構成し、かつ、その生きるありようを劇的に変化させている、Assistive Technology、さらにはタブレットを活用していくことになるだろう。本研究では、試験的に「生きるためのリテラシー」を記述し活かすことができるタブレット・アプリケーションを想定し、そこで蓄積されるデータを検討しつつ、障害者・児にとっての「生のリテラシー」を構想する。

4. 研究成果

本研究の基本的枠組みは、障害者の生きる場における「生きる知恵」をリテラシーとして理解し、テクノロジーをとおしてそれを把握し、活かす術を探るところにある。その(1)「理解・整理」と(2)「把握・活用」の両面で、本研究は着実な成果をあげてきた。

(1)「理解・整理」

まず、(1)「理解・整理」という点では、障害者・児の主体面に注目した分析と、そこで生きる地域生活に注目した分析、および整理をおこなった。まず、日本の社会状況の整理をおこなった(Shibata 2015)後に、障害者・児の生活面における課題と、そこで生きるための技法を整理(Shibata 2016)してきたが、そのなかで一番まとまった成果となったのが、柴田(2016a)となった。そこで整理されたのは、障害者・児が生きるためにそれぞれ編み出している技法を、「自立とケイパビリティ」という横軸と、「参加とアクセシビリティ」という縦軸に配置し、その交点から「生のリテラシー」を考察するという理論枠組であった。掲載された雑誌『現代思想』は、著者の研究領域を代表する雑誌であり、それに掲載され評価をいただいたことは、本科研の当面における、最大の実績といえ、本研究が今後学術的にも評価され、また社会的要請に応えるための、重要な手がかりになっていると言えよう。この理論枠組は、実際にアプリおよびデータベースの開発をする際の、A)自立生活、B)学習、C)社会参加の3要素の抽出概念としても機能している。

その中でも特筆すべき実績として、アメリカ・ハワイにて半年間の在外研究を実施することができたため、より「表層的なテクニックではなく本質的な、社会参加のためのリテラシー」という観点から、再び洗練化することができた点である。具体的には次節でも触れるが、A.Goffmanの「状況」(situation)を元に理論軸を導入し、上記の枠組整理に、より理論的な根拠を与えることができるようになった。その成果は、(Shibata 2017b)というかたちで整理され、また、続く柴田(2019)などでもさらに社会背景を反映させつつ、社会参加のためのテクノロジーとしての必要性と可能性を論じるなどして、発展されている。

(2)「把握・活用」

(2)「把握・活用」は、上記の(a)「理解・整理」における理論的かつ社会分析的な成果を受けつつ、それを同時並行に進めるなかで、具体的に「生のリテラシー」をどう把握し、どう蓄積させ活かすのかを具体化する試みであった。そのための一つは、社会調査的技法を用いて該当するリテラシーを分析し、かつ論じ、データベースとしての実現の可能性をめざすというものである。

本研究においていくつかの形で報告されたが、特にまとまった成果とすることができたのは、柴田ほか(2016b)である。これは対象を代表者にとって一番馴染みの深い聴覚障害(ろう・難聴)にしぼり、主としてテクノロジーとしてのClosed-Captionの活用から実施された全国調査を元に、本研究での理論枠組を参照して分析したものが主となっている。例えば下記の表1のように、障害の有無という状況において、「聴覚障害者のためのテクノロジー」と思われたClosed-Captionでさえ、その活用の

され方によるインパクトに有意差があることが示された(柴田ほか2016b『表1』)。特に専門領域である難聴者の

表1 分散分析表:字幕付きCM 絶対評価、インパクト

要因	柴田ほか(2016b)より				
	自由度	平方和	平方平均	F値	有意水準
インパクト	3	8676.78	2892.26	4.351	0.005 **
誤差	895	594918.02	664.713		

** p<0.01

の生活場面におけるメディアとしてClosed-Caption(メディア上の文字表現としての字幕)に注目したそれは、キーワードとして「社会的包摂(インクルージョン)」と「共生(コンヴィヴィアリティ)」を2つの尺度として、「生のリテラシー」を具体的に抽出することに大きな成果を得た。これらの類する著作は、国際的にも類例が、Zdenek(2015)などしかなく、顕著な成果だと評価できる。



図 2 開発したタブレットを使用している場

さらに本研究の柱である、具体的なアプリの開発をおこなった。関連する各種研究の成果を活かし、難聴および発達障害児のコミュニケーション・リテラシーを具体的に支える局面に焦点を当てた実践をめざし、状況を具体的に表記するピクトグラムの搭載、および文字表記の搭載を試みた。開発には技術的な支援が必要であるため、研究協力者をはじめ、技術面で関連する研究者からの協力を受けながらすすめることができた。その成果は Shibata et. (2017a) や柴田ほか(2018) などとして発表されてきたが、一番よくまとまっているのは、Shibata et. (2019) である。

先の(1)理解・整理での分析軸を受けて、かつ前述の Closed-Caption での調査結果を受けて、本研究におけるタブレットは、(2)リテラシーを一連の流れ=シークエンスとして蓄積できるものとして開発した。

Shibata et. (2019) は、2015 年および 2017 年に実施された、アプリの実際の評価の分析である。前述のように、A) 自立生活、B) 学習、C) 社会参加の 3 要素に注目し、そのシークエンスの生成と蓄積をとおして、「生のリテラシー」の具体的抽出と積層の分析を試みた。リテラシーという面では、障害者・児らユーザーの「コミュニケーション」と「理解」の向上が基本となるが、図 3 のように、日常生活においては積極的な評価を得ることができたものの、評価できないという回答も少なくなかった(Shibata et. 2019)。しかし、例えば社会参加の局面で同じようにシークエンスのストックの評価を聞くと、図 4 と比べても明確に高い評価を得ることができた(Shibata et. 2019)。これはつまり、タブレットが示す「生のリテラシー」の蓄積が、より社会的な生活面で活用されうる可能性を、明確に示していると考えられる。

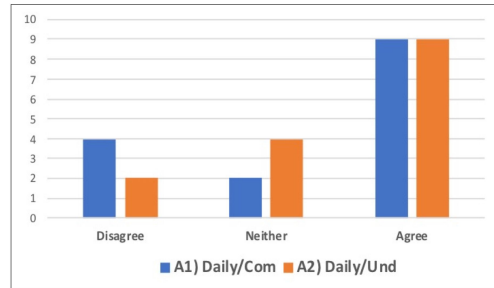


図 3 日常生活におけるアプリ活用

(Shibata et. 2019 より)

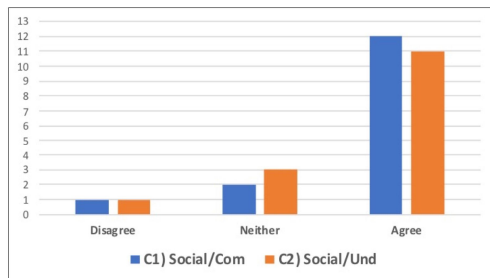


図 4 社会参加におけるアプリ活用

(Shibata et. 2019 より)

さらに本研究において画期的だったのは、2 年目に、本研究の発展として国際共同研究加速科研費に採択されたため、長期の在外研究期間を過ごしたことで、より広い視座で研究を捉え、時間をもって洗練化することができた点である。

まず大きな影響を受けたのは、前述したように、本研究の理論的なバックボーンに、アメリカをはじめとする国際的な Theory Studies の動向を取り

り入れることができた点である。「社会参加のリテラシー」を、Erving Goffman の理論を活かした議論について触れることができた。Goffman の理論は元来、障害のある人についての Disability Studies と相性が良い。そのためその理論を、主著 "Relation in Public" を参考に具体的に読み解き、研究面への応用をはかった。国内では把握しにくい国際潮流も合わせつつ、研究の精緻化を目指すことができた。

もうひとつ、国際研究としての発展の契機となったのは、アメリカにおける「生のリテラシー」を調べていく中で、そこでもっとも力を入れているのが「Learning」=「学習」のありようであったという点である。元来、「リテラシー」という概念において教育・学習という観点は不可欠で、柴田(2015)などでも研究していたが、国際的な潮流はさらにその方向で加速しており、また、本研究におけるリテラシーの共生への結実という点でも、もっとも重要な領域として立ち現れていることがわかった。そのため、本研究も 1 年期間を延長し、アプリ・データベースの開発も「生きるための技法をどう学ぶか・学んでいるのか」に焦点を絞り込んでいくことになった。もちろん国際共同研究加速の科研費とは妥当な役割分担をすることを意識しており、特に本基盤研究においては、日本国内の障害者・児の動向を踏まえた研究活動として切り分けてきた。その成果は Shibata, et., (2019) や「インクルーシブ教育」(柴田, 2017, 松本など 2017 に採録)などでも触れられているが、現在、それを取りまとめた出版計画が進んでおり、2019 年度中に上梓される予定である。

障害のある人・子どもにとっての「生きるためのリテラシー」は、期間をとおして調べ切っても、極めて多様で、簡単に扱ったり蓄積したりできるようなものではないかもしれない。しかし本研究は、ある障害当事者にとっての生きる技法が、他の障害者や障害児にも有意義であり、かつそのように共有することができる可能性を、確実に提起し、そのためのテクノロジーを描くことができたと考えている。そのための国際的な手がかりとなっているのが、日本では教育学と混

同して考えられている”Learning Studies”であった。障害のある人・子どもが、どのように生きることによって挑戦し学んでいくかという過程そのものが「生のリテラシー」なのである。本研究は、この視点から継続している科研費・国際共同研究加速で発展させていくとともに、アプリ開発などで協力を得てきた Hattori, et., (2018)らと本研究を土台に発展させた共同研究などに活かし、「当事者にとっての学び」の社会的意味と共生へのインパクトを考究していく予定である。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

Shibata, K., Hattori, A., Matsumoto, S.,2019, “Communication App for Children with Hearing and Developmental Difficulties”, Journal on Technology and Persons with Disabilities Vol.7 (accepted) 【査読有】.

柴田邦臣, 2019, 「ビッグデータ・Citizenship-Rated Society: 障害者の自立と私たちの「真実の物語」, 『現代思想 vol.47-6』 pp. 75-79【査読無】.

Hattori, A., Shibata, K., Matsumoto, S.,2017, “A Tablet Application to Support Communication for People with Disabilities”, IADIS digital library: 11th International Conference on Interfaces and Human Computer Interaction. pp. 167-176 【査読有】, <http://www.iadisportal.org/digital-library/a-tablet-application-to-support-communication-for-people-with-disabilities>.

Shibata, K., Hattori, A., Matsumoto, S., 2017a, “Media for Capability” of Children with Disabilities: Development of the Japanese Augmentative Alternative Communication App by Tablet for Persons with Hard of Hearing, The Proceeding of the Hawaii International Conference on System Sciences 2017, pp. 1-6【査読有】
<https://doi.org/10.24251/HICSS.2017.462>.

吉田寛, 大井奈美, 柴田邦臣, 2017, “個人情報・マイナンバー・ビッグデータ: Citizen Rating Society に, 社会情報学 は応答できるか「社会情報学の〈これから〉 ~ 若手研究者からの発言」, 『社会情報学 5(3)』, (一社)社会情報学会, pp. 5-14【査読無】
https://doi.org/10.14836/ssi.5.3_5.

柴田邦臣, 2016a, 「コンヴィヴィアル・メディア・リテラシー: そして『障害者の自立と共生』から何を学ぶか」『現代思想 vol.44-9』 pp. 192-210【査読無】.

柴田邦臣, 2015, 「ある1つの 革命 の話: インクルーシブな高等教育と共生の福祉情報」『情報処理 56(12)』, (一社)情報処理学会, pp. 1210-1213【査読無】
<http://id.nii.ac.jp/1001/00145827/>.

〔学会発表〕(計 8 件)

Matsuzaki, Y., Kaihara, C., Hamamatsu, W., Shibata, K., 2019, “Inclusive Accommodation between Campus and Community”, The 33th Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, Hawaii Convention Center【査読有】.

柴田邦臣, 松本早野香, 服部哲, 2018, “障害児・者の教育とコミュニケーションを促進するアプリの開発と実証 - 学ぶための土台(Learning Roost)の提示 - ”, グループウェアとネットワークサービスワークショップ 2018, 情報処理学会グループウェアとネットワークサービス研究会, 美ヶ原温泉 ホテル翔峰(長野県松本市)【査読無】.

貝原千馨枝, 松崎良美, 柴田邦臣, 2017, 「『テクノロジーによるインクルージョン』と『テクノロジーへのインクルージョン』-津田塾大学・インクルーシブ教育支援室での取り組み-」, Augmentative Talent & Acceptable Community Conference 2017, 京都国際会館【査読無】.

Shibata, K.,2017b, “Relation in Public and Social Interaction for Children with Disabilities - Goffman’s Theory and Tablet Media”, The 33th Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, Hawaii Convention Center【査読有】.

Shibata, K., 2016, "Convivial Media -Information and Assistive Technology for Persons with Disabilities-", The 32th Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, Hawaii Convention Center【査読有】.

柴田邦臣, 2016, 「『配慮の合理性』とテクノロジー-障害者の字幕とメディアの利用から-」社会政策研究ネットワーク(SPSN) 研究例会, 日本女子大学【査読無】.

服部 哲, 柴田邦臣, 2015, 「音声認識を利用したスケジューラアプリの予備実験」グループウェアとネットワークサービスワークショップ 2015, 情報処理学会グループウェアとネットワークサービス研究会, ホテルニュー塩原(栃木県那須塩原市)【査読無】.

Shibata, K., 2015, "Welfare Society for Human Development-Ability, Capability, Reasonable Accommodation of Persons with Disabilities and Elderly People in Japan-", The 31th Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, Hawaii Convention Center【査読有】.

〔図書〕(計 4 件)

アメリカ学会編, 2018, 『アメリカ文化事典』, 丸善出版, (柴田邦臣, 「インクルーシブ教育」 pp. 400-401).

伊藤守, 小泉秀樹, 三本松政之他編著, 2017, 『コミュニティ事典』, 春風社.(柴田邦臣, 「災害情報とコミュニティ:過疎・高齢化する地域と関係性のメディア」, 636-637, 柴田邦臣, 「写真のなかのコミュニティ:「共生」の記憶と覚悟をめぐる」, 930-931).

柴田邦臣, 井上滋樹, 吉田仁美, 2016b, 『字幕とメディアの新展開 多様な人々を包摂する福祉社会と共生のリテラシー』, 青弓社, 全 181 ページ.

西垣通・伊藤守編, 2015, 『よくわかる社会情報学』, ミネルヴァ書房, (柴田邦臣, 「医療・福祉」, 106-107).

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(2) 研究協力者

研究協力者氏名: 斎藤茂(NPO ばざーる太白社会事業センター代表理事).

ローマ字氏名: Shigeru Saito (NPO BTSW).

研究協力者氏名: Jean Johnson(Center on Disability Studies).

ローマ字氏名: Jean Johnson(Center on Disability Studies).

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。